厚生白書の「育児不安」からみた子育ての問題構造

○ 日本大学 氏名 阿部 里美 (008950)

キーワード3つ: 育児不安、厚生白書、子育て支援

1. 研究目的

本研究は、厚生（労働）白書において「育児不安」の捉え方と子育て支援策の展開について明らかにする。白書（政府）の「育児不安」の捉え方について整理・考察を行い、日本における子育ての問題構造を明らかにすることを目的とする。

近年、わが国では「核家族化や都市化、少子化によって育児不安が出現、増大し」（宮本・舟越・中添ら 2000、厚生労働省 2014）、社会問題となっている。そうした状況を踏まえ今日では「育児不安」に対して多くの子育て支援策が展開されるようになった。

「育児不安」とは、「育児の行為の中で一時的あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく、持続し、蓄積された不安の状態」と定義づけられている（牧野 1982 : 35）。牧野は「育児不安」を負荷事象とし、それは母親の問題ではなく、外的要因、社会や環境に問題があることを明らかにした。しかしながら、近年では虐待や子どもの発達への関心を背景に、「育児不安」は危機的に捉えられている。そこで本研究は再び母親への批判や過度な期待がなされているのではないかという問題意識の下で、日本の子育て問題の構造を明らかにしようとするものである。

2. 研究の視点および方法

分析資料として用いる厚生（労働）白書は「政府の現状や展望に関する公式の表明」（庄司 1984 : 44）であり、白書を分析することで、政府がどのように「育児不安」を解釈し、支援策を展開しているのかを明らかにできる。分析の対象年は、白書において「育児不安」が初めて登場した 1989 年から 2013 年である。分析にあたり①「副題と総説」は白書全体の子育ての問題認識、②「児童福祉に関する概説」は児童福祉事業における子育ての問題認識、③「児童福祉の各論」は実際に行われた事業内容（「児童福祉に関するプログラム・カテゴリー」）と位置付け、データベース化し分析を行った。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針を順守し、引用・参考文献等を明記する等の倫理的配慮を行った。

4. 研究結果

厚生白書の総説や児童福祉の各論には、1970年代から今日にかけて一貫した問題認識がある（阿部 2015）。それは①「(児童・家庭を取り巻く)環境の変化」②「家庭の養育機能の弱体化とその支援」③「児童の健全育成」であり、子どもは人口政策・社会保障の観点から「次代の担い手」と位置づけられ、支援策の必要が問われている。そのなかで「育児不安」の捉え方は変化している。

第一に「家庭支援への着目期」（1989～1992年）では、1989年に母子保健において「育児不安」の記述が白書に初めて登場する。白書では環境や家族の変化、とりわけ夫婦の出生力の低下が問題認識として大きく取り上げられ、母親の「こころ」の問題、「育児不安」が指摘される。

第二に「総合的な子育て支援、虐待対策期」（1993～2000年）では、総合的な子育て支援の必要がより一層重要視されていく。1993年以降には虐待対策の関心が高まり、1997年には「育児不安」は虐待と結びつき、危機として捉えられる。

第三に「次世代育成支援（両立支援と虐待対策）期」（2001～2013年）では、厚生労働省に移行された2001年以降、子育て支援策の問題意識は両立支援策と虐待対策に二極化され、「育児不安」の捉え方も二分される。

とりわけ虐待対策の「育児不安」は、母親の孤立した子育てや子どもとの接触不足により引き起こされるものであり、また虐待の要因としてさらに大きく取り上げられている。そしてそれらは母親に起きるものとし、子育ての問題を母親に焦点化している。

5. 考察

政府は子育て家庭の養育力低下を危惧しており、実際の具体的な支援策は相談事業を中心に、子育て家庭の養育力の強化を目指す事業が目立っている。そうした日本の子育て支援策には母親の第一義的責任を強調する性格が推察される。

「育児不安」は、①孤立、自信のなさ、子どもとの接触不足により「育児不安」が起きる、②「育児不安」が虐待や子どもの発達に影響するという二点の捉え方がある。そして近年では虐待の主な要因として「育児不安」は危機と捉えられ、「育児不安」を持つこと自体が親・母親の育児態度で望ましくないものだと解釈されている。白書（政府）が目指す子育て支援において、「育児不安」は望ましくない母親像を描くための“都合の良い言葉”として用いられている。家庭支援や子育て支援策が必要とされる一方、育児が母親の問題から脱却できておらず、それが日本の子育ての問題構造の一つだと考える。

（紙幅の制限から参考文献は当日配布資料にて掲載する。）